

本館
所蔵

古文書摘録(一〇)

——溝江・新庄家文書(九通)——

柴 辻 俊 六

一、はじめに

本誌二十五号(昭和六〇年三月刊)に「南都諸大寺関係文書(一卷八通)」を紹介したが、その中の記述でいくつか不都合のある点を指摘されたので、ここに、まずその釈明をしておきたい。

一つには、図書館の整理の手續きに明るくなかったため、受入簿の記入を正式書名と誤認したことであり、購入先は「四谷伊藤平蔵」であることの指摘を受けた。また目録の表題書名は、単に「古文書 一卷」ではなく、「建久文安間古文書六通・断片二枚」であった。その点お詫びして訂正しておく。同様に、本館の閲覧用書名目録および印刷目録の『和漢書分類目録 歴史篇』でも「建久文安間古文書六通・断篇二枚」という書名で採録され、特別図書に指定されている。これらの点の指摘を館内からうけたので、ここにその旨を記して感謝の意を表しておきたい。

そこで少し感想をのべておきたいが、古い歴史のある図書館なので、いろいろな記録やカードのあることも一面ではしかたのないことと思うが、そうしたものの相互の関連や、引きつぎ具合などを誰にでもわかるような形で整理しておいてもらいたいということであり、それは図書館の責務でもあると思う。もう一つには、そうしたものが、館員ならいつでもすぐに見られるような型に

なっているべきであって、「知る人ぞ知る」といった型は好ましくなくと思う。これらの受入関係の帳簿は、ある意味では、すでに古記録であって、本館の歴史にとっては重要な意味をもつものである。館員ばかりでなく、一般の利用者においても、古い圖書の書誌を調べるような場合には当然必要となってくるものであろう。ここではそうした人のために、館内には数種の旧帳簿や旧カードのあることを指摘しておくにとどめる。ただし、それらは館内業務用のものであって本来的には全面公開されているものではないことをお断りしておく。

もう一つの指摘は、前文で、「その題簽には、単に『古文書』とのみしかなく、どこかという古文書なのかの表題はついていない。つまり、購入前に書肆側が付した表題のままで、六十余年間、まったく調査・研究の手が入らないまま図書館に保存されていたのである。これは、その当時購入にたずさわった人達の責任であり、その後、それを管理してきた人達の怠慢でもある。」と書いた部分についてである。この点は、図書館以外の方からも、館内での不協和音のように思われるので、訂正して謝罪しておいた方がよいのではないかとこの注告をいただいたので、その点は筆の走りすぎを素直に表明して、先輩諸氏に失礼のあったことをお詫びしておきたい。

ついにながら、現在、本館では、『早稲田大学蔵資料影印叢書』を順次刊行しており、その中に、古文書集も三巻が予定されていて、遠からず館蔵のこれらの古文書集も紹介されることになっている。その事業と、小生が進めているこうした古文書紹介とは、一部において同じような性格があるようにも思われているが、『資料影印叢書』は文字通り、写真版による全文紹介であって、それに全体としての解説解題が付されるのみであって、各個の古文書についての解説文や一通ごとの解説・解題は付されていない。従って両者は全く性格の異なるものであって、何ら競合関係にあるものではないことをお断りしておきたい。

一、形態的所見

本文書は箱書の表題に、「溝江文書 九通 原本」とあるものであり、全九通が簡単な裏打ちを施こされたままで元の形態を保つ

ており、全部が原本ではないが、一応すべて内容的には新資料である。全九通は無年号のものが多く、推定してほぼ年代順に配列した目録を示すと、左のようになる。

- ① 羽柴秀吉知行宛行状写 天正十一年八月朔日
- ② 羽柴秀長書状 (天正十三年) 五月十一日
- ③ 豊臣秀吉書状 (年未詳) 十二月廿九日
- ④ 長束正家書状 (年未詳) 二月七日
- ⑤ 豊臣家四奉行連署書状 (年未誌) 卯月廿九日
- ⑥ 山中長俊書状 (年未詳) 九月九日
- ⑦ 豊臣秀吉禁制写 天正廿年四月廿四日
- ⑧ 豊臣秀吉書状写 (年未詳) 九月十一日
- ⑨ 徳川家光年貢皆済状 寛永元年七月 日

このうち、宛名からみて、②～⑥までの溝江氏宛のものと、①と⑦～⑨の新庄氏宛のものとはっきりと分けられるから、この文書集は単に「溝江文書」ではなく、「溝江・新庄家文書」というべきものであり、この中には明らかな偽文書である⑦の豊臣秀吉禁制が一点ふくまれている。偽文書と判断した理由は後述する。

この文書集は、古文書の伝来を考えるのに一つの参考資料となる。つまり、早くに滅びた溝江家と、知行地関係でそれを継承した新庄家との文書が合体したものであって、溝江氏の後裔が家伝文書を所有していた際に、旧知行地の新領主となった新庄氏の一部の関係文書を写して同じく所蔵していたものであらうと推定される。この溝江家文書は、すでに大正十年(一九二一)に東京大学史料編纂所の調査をうけており、その時の記録では、「滋賀県・溝江東一郎氏蔵本、十五丁六点影写」となっている。それ以前に、京都大学でも調査をしていたようであり、詳しい記録は不明であるが、『国書総目録』によると、「溝江文書 一冊、福井県・

溝江東一郎蔵本写」となっている。これらからみて、溝江氏の末裔である溝江東一郎氏が、はじめ福井県に住んでいて、大正十年以前には、滋賀県へ移り住んでいたことが明らかであり、その段階では、本文書を所有していたわけである。その後、何らかの理由でこれが巷間に流れ、それを本館が大正十年に購入したという経過になる。館の記録によれば、当時の文学部教授の西村真次氏の紹介によって、古書肆より購入したものである。本館での扱いは特別資料となっており、請求記号は、リ四―四三七〇である。

形態的には前述したように、明らかな偽文書一点と二通の写をふくむものであって、他はすべて原本であり、未表装なので、紙質や寸法などをもとのままの形で観察することができる。各文書に包紙も現存しているが、この方はいずれも新しいものであって、江戸時代に後補したものである。現在では九通ともに状箱に収められているが、この箱は本館で後補したものである。

三、内容的所見

各個については、本文紹介のところで注記するが、ここでは、全体的なことについて二、三コメントしておきたい。まず、五通の宛名になっている溝江氏についてであるが、溝江氏は越前国坂井郡溝江郷を本貫とする越前朝倉氏の支族であって、『福井県坂井郡誌』などによると、その発祥および途中経過は不明であるという。この溝江郷は、古くは溝江庄とも称したようであり、長徳四年（九九八）の東大寺領注文（『東大寺要録』）にその名が見えている。さらに河口庄の一部として、寛弘八年（一〇一一）の「河口庄御檢注郷々仏神田注文」には「溝江郷 十四町九段小三十六歩郷 南部惣公文伊予法眼」ともみえている。溝江氏のこと文献に見られるようになるのは、戦国期に入ってからであって、加賀の一向一揆と越前朝倉氏との抗争の経過の中で、その名前が散見してくる。まず、享禄四年（一五三一）、本願寺より下間筑後法橋頼清が加賀国へ派遣され、それによって加賀一向一揆が再蜂起した際、敗れた富樫泰高は越前金津城の溝江氏のもとへ逃れている。天文二十二年（一五五三）には、富樫泰高は死去し、その子富樫介も溝江大炊介長逸を頼って金津城へ入るが、その後、一向一揆の攻勢にあつて、天正二年（一五七四）二月には、金津城が包囲され、大炊介長逸はその父景逸はかとともに族滅している。その滅亡時の経過については『福井県坂井郡誌』の溝江氏条に詳し

く記されており、妻子眷属ともども自害して果てたという。

その後の溝江氏の動向は不明となり、越前においては、天正三年（一五七五）八月に織田信長が大軍をもって出陣し、一向宗徒の制圧を果し、九月には九カ条からなる国掟を制定して凱旋しており（信長公記）、その後は柴田勝家が越前の支配をまかされたのであった。さらに天正十年（一五八二）六月の信長の横死後には、その柴田氏も賤ヶ嶽の戦いで羽柴秀吉に敗れ、越前は丹羽長秀が支配することになった。この間における溝江氏についても何ら記録はみられず、天正二年の滅亡後にその後裔がどう命脈を保っていたのかは不明である。しかし、ここに紹介しようとする「溝江文書」は、この越前溝江氏の流れに属するものであることは確かであり、後の史料からみて羽柴秀吉に頼りて再興を計ったのではないかと推定されるのである。そうした経過を明らかにさせるものとして、本文書の②③⑥の溝江氏宛の文書は重要な意味をもってくるものである。いずれにしても天正十年代に入って秀吉の家臣となった溝江近江守と大炊介が実在したことは確かであり、天正二年からの空白期間の解明は今後の検討課題である。

さて、つぎに残り四通の宛名となっている新庄氏であるが、『寛政重修諸家譜』（巻八二〇）によれば、近江の蒲生氏族であって、坂田郡新庄荘を本貫としており、直寛（新庄城主）―直昌（坂田郡朝妻城主）は足利義植・義晴の近臣であった。直昌の子直頼（新三郎・駿河守・宮内卿法印）が豊臣秀吉に仕え、天正初年に摂津国山崎城へ移り、天正十一年（一五八三）の賤ヶ嶽合戦後に大津城主となり、さらに文禄四年（一五九五）には摂津国高槻城主となっている。慶長十七年（一六一二）十二月に没しており、その子直定は徳川秀忠に従って、遺領を安堵されている。直定（新三郎・越前守）は二万三千石を領し、奏者番に列し元和四年（一六一八）に五十七才で没している。この新庄本家に対して、直昌の二男直忠は刑部・刑部左衛門といい、兄直頼とともに秀吉に仕え、一万四千石を領している。入道東玉とも称しているところから、本文書①の秀吉知行宛行状写によって、天正十一年（一五八三）八月に近江国浅井郡内で二百石の知行を宛行われていることが明らかとなる。この直忠の系統は、直氏から直興へとうけつがれ、江戸時代には旗本となっている（『寛譜』巻八二二）。

本文書中の①と⑦⑨はこの新庄直忠宛のものであるが、『寛譜』によれば、信長の没後に秀吉に仕え、文禄元年（一五九二）の

朝鮮出兵に加わり、近江国浅井郡ほかで一万四千石余を領知していた。秀吉の死とともに京都に閑居し、慶長十九年（一六一四）の大坂の陣に至って家康に従い、旧領地である近江国坂田郡柏原の御殿守護を命ぜられ、その付近の御料所を預けられた。元和六年（一六二〇）に七十九才で没し、その子直氏が柏原御殿預りを引きついだ。本文書の⑨は、その柏原御料所の代官としての元年から六年間分の年貢皆済状である。

四、本文紹介と解説

以下、個々について全文の紹介と簡単な注記をしておきたい。本文の印刷については、行がえや用字など、ほぼ原本どおりとしたほか、通常の方法によって活字化した。

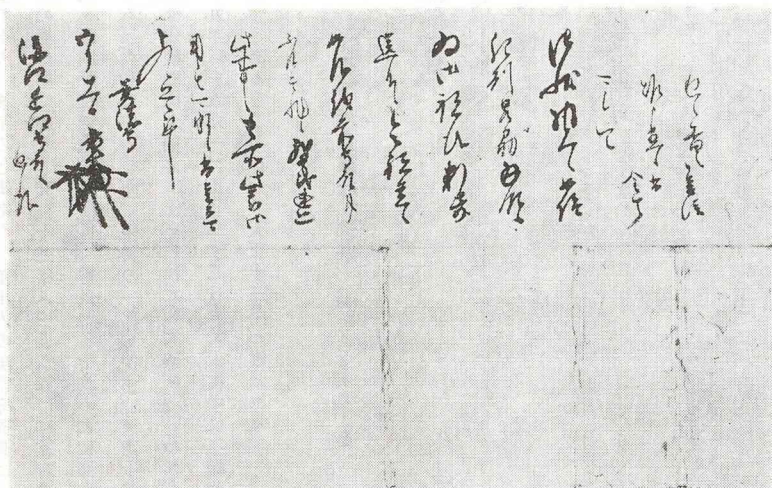
①羽柴秀吉知行宛行状写（折紙）（三〇・八×四九・〇）

（新庄直忠）
東玉入道

江州浅井郡
阿閉分柳野之
内以貳百石宛
行早、永可領
知状如件、

○本文書は、紙質、筆蹟からみて、明らかな写である。宛行知行地である阿閉分（あつち）柳野は、『大日本地名辞書』によれば、滋賀県伊香郡安曇郷の本称で、古保利村の大字という。郷土として阿閉氏があり、天正十年の本能寺の変で明智光秀に属して没落した。柳野も古保利村の大字であるという。宛名の「東玉入道」は、新庄刑部左衛門直忠である。

天正十一
八月朔日秀吉（花抑）



②羽柴秀長書狀（折紙）

②羽柴秀長書狀（折紙）（三一・八×五〇・四）

返々沓之御音信、

難申盡候、尚金七郎

可申候、以上、

御狀拝見候、如仰

紀州泉刃拝領候、

為御祝儀判帋

送給候、令祝着候、

如仰越前守殿事

不及是非候、我木儀速思

此事候、貴所此度御

用候者可承候、尚重而可

申入候、恐々謹言、

五月十一日 美濃守 秀長（花押）

溝江近江守殿 返報

○裏打あり。後補の包紙あり。差出人の美濃守秀長は、羽柴秀吉の異母弟であり、天正十三年（一五八五）に秀吉の紀州征伐・四国征伐で大功を立て、秀長と名を改め大和郡山城主となる。大和の他、紀州、伊賀の一部も領す。天正十五年の九州征伐後に権大納言に任ぜられ大和・大納言といわれる。天正十九年（一五九一）正月二十二日没。本文中に「紀州泉脇拝領」とあるところから、天正十三年と思われる。

③豊臣秀吉書状（折紙）（四六・三×六六・五）

為歳暮之御
祝儀、小袖ニ
到来、悦思
食候、尚委曲
長束大蔵太輔可
（正家）
申候也、
（年未詳）
（秀吉朱印）

十二月廿九日

溝江大炊介とのへ

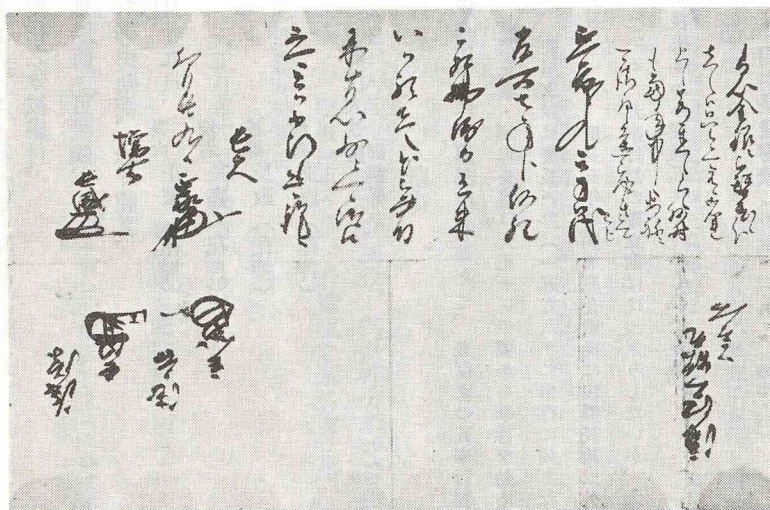
○大高檀紙に大書されている。包紙は後補のもの。秀吉朱印は直徑、三・六センチのいわゆる糸印である。本文中の長束正家が秀吉の奉行となったのは天正十三年（一五八五）であるから、それ以後の文書である。

④長束正家書状（折紙）（三二・二×四九・八）

尚以金津橋之儀、
具判帑を以如申入候、
可被懸御意候間、可有

御状殊雁ニ
其御心得候、以上、
被懸御意過分
至極候、誠に御懇
情之段難申謝候、
猶以面上御礼
可申入候、恐々謹言、

（年未詳）
長大（長束大蔵太輔）
二月七日
正家（花押）



⑤豊臣家四奉行書状(折紙)

溝大炊殿御報

○差出人の長大正家は、豊臣秀吉の五奉行の一人である長束大蔵大輔正家であり、天正十三年(一五八五)に秀吉に仕える。同十九年閏正月には近江国の検地奉行を勤める。文禄四年(一五九五)六月には五万石で近江国水口城主となる。慶長五年(一六〇〇)関ヶ原合戦で西軍に属し、敗れて自殺する。追って書の「金津橋」は、溝江氏の旧領であつた越前金津の橋のことか不明。

⑤豊臣家四奉行連署書状(折紙) (三三・四×五〇・三)

尚以金銀ニ被替置候分

在之ハ、只今可有御運

上候、若遅ミ候ハ、何時

も当年中ニ安祢ニ

可請取候条、可被得其意候、已上、

不一度申入候、其方御代

官所去年分何欵

被相拂渡而、有来

いか程在之分被書付、

来十日以前ニ可渡候、

不可有御由断候、恐々謹言、

（年未詳）
長大 正家（花押）
卯月廿九日

増右 長盛（花押）

浅弾 長政（花押）

徳善 玄以（花押）

溝江大炊殿

御宿所

○差出人の四人に石田三成を加えて、豊臣家の五奉行制という。長束正家・増田長盛は天正十三年頃から奉行を勤めていたが、前田玄以は慶長三年（一五九八）に奉行に列したといわれている。慶長五年の関ヶ原合戦後に浅野長政以外は自害している。五奉行制の確立期ははっきりしないが、本文書は文禄末年から慶長五年までのものである。

⑥ 山中長俊書状（折紙）（二九・六×四七・三）

猶被成 御朱印候、
御心易候、

可有御頂戴候、

御家相替事無之候、可
期面候、以上、

御進上之生鮭、則

致披露候、

御感之旨相意得

可申遣候由御詫候、

附而源氏抄鑑于

請取申儀、其節者

一筆給候、取紛御礼

をも不申、非所存候、尚

期面拜候、恐々謹言、

（年未詳）
山々城
九月九日 長俊（花押）

溝江大炊様

御報

○差出人の山城守長俊は天文十六年（一五四七）近江甲賀郡山中に生れ、佐々木入道承禎に仕える。近江六人衆という。信長の六角氏攻め以後、柴田勝家に仕え三千石を知行する。天正十一年（一五八三）、勝家滅亡の後、丹羽長秀に属す。この

頃より、秀吉と親交あり。長秀の没後は堀秀政に寓居する。その後太閤秀吉につかえ、従五位下山城守に叙任し、一万石を宛行わる。慶長五年関ヶ原陣では大坂方に属し、知行を没収される。

⑦ 豊臣秀吉禁制写 (三四・六×四六・七)

禁制 高麗國

一、軍勢甲乙人等濫妨狼籍事

一、放火事 付人取事

一、對地下人百性、臨時之課役、其外非分儀申掛事、
右条々、堅被停止之訖、若違犯之輩於有之者、

忽可被罪科者也、

天正廿年四月廿四日 (秀吉朱印影)

新庄刑左衛門尉とのへ

○用紙は後世のもので、筆蹟も弱い。写というより偽文書と判断される。

⑧ 豊臣秀吉書状写 (折紙) (三四・五×四六・二)

古文書摘録 (一〇)

其表儀、諸事無油断通、

申越之趣被聞召届候、弥可入

情事專一候、賀須屋内膳・

太田源五一手在之由尤候、

於様子者、藤堂佐渡守被仰

遣候、猶木下半介・山中橋内

可申候也、

九月十一日 (秀吉朱印影)

新庄刑部左衛門尉とのへ

⑨ 徳川家光年貢皆済状 (四〇・五×五六・八)

近江国之内、新庄吉兵衛尉

代官所、自元和元卯年

同六申年迄、六ヶ年分所務

事、

右皆済也、

寛永元子年七月

(家光黒印)